

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12284

研究課題名(和文) ことばと自己認識の喪失過程で認知症者の認識世界に何が起きているのか？

研究課題名(英文) What happens to recognitions of dementia patients in the process of losing words and self-recognition?

研究代表者

横井 輝夫 (Yokoi, Teruo)

高知県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：00412247

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果として、以下の3編の論文を作成した。論文“病気の言語論的理解”と“言語論からみたアルツハイマー病”は、世界五大医学誌といわれる雑誌に投稿し不採択であったが、現在、再投稿の準備をしている。“病気の言語論的理解”は、人間の病気の発症や症状の理解に言語論的方法を加えることの必要性を論じたものである。“言語論からみたアルツハイマー病”は、一人称のアルツハイマー病者を主人公にして、言語で創造された世界が崩れていく様子を論じたものである。“言語を失った重度アルツハイマー病者の行動を理解する視点”(投稿中)は、言語を失った重度アルツハイマー病者の行動を理解する視点を論じたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究目的は、ことばの喪失過程で、アルツハイマー病の人の認識に何が起きているのかを明らかにすることであった。

ことばはコミュニケーションや思考の手段である前に、世界を分節(区切り)し、人間の認識をつくるのが根源的な働きである。ことばで世界を区切る前は、世界は連続していた。ことばとして表現されてはじめて、われわれは森羅万象の存在を明確に意識できる。ことばでつくられた世界が崩れてゆくアルツハイマー病。言語論的分析を通して、はじめてアルツハイマー病の人の世界(認識や行動の意味)が分かる。それはケアの方法を明らかにすることになる。

研究成果の概要(英文)：As my research development, I wrote three papers. I submitted two of them, titled “Linguistic understanding of illness” and “Alzheimer’s disease from the linguistic viewpoint”, to one of the most prestigious medical journals in the world. They were rejected by the journal, yet, I am revising to resubmit them again. The first paper “Linguistic understanding of illness” argues that adding linguistic approach expands a new horizon to the understanding of onsets and symptoms of illness. The second paper “Alzheimer’s disease from the linguistic viewpoint” argues the way a person cannot escape from living within the boundary of language, treating “I” (patients with Alzheimer’s disease of first person) as the main character. The third paper “A perspective to understand the behavior of severe Alzheimer’s disease patients with loss of language skill” (under submission) discusses how to understand cognitive point of view and behavior of patients with Alzheimer’s disease.

研究分野：リハビリテーション学

キーワード：アルツハイマー病 ことば

1. 研究開始当初の背景

認知症は記憶、思考、判断、見当識、注意など認知機能の単独、あるいは複数のカテゴリーの障害ではない。これらのカテゴリーをいくら寄せ集めても、認知症者の認識している世界はわからない。人間の認識は、言語によってつくられている。ことばの本質的な働きは、コミュニケーションではなく、世界を分節することである。

例えを少し示してみる。空に浮かぶ常に形を変え、けっして同じではありえない、あのもぐもぐしたものを雲と名づけた瞬間、空から雲が切り分けられ、我々の前に雲が現れた。見えないが、これがなければ生きてはいけない物質を空気と名づけた瞬間、我々の前に空気が現れた。情動もそうである。悲しいということばを獲得したから、今、私は悲しいのだと意識できる。悲しいということばがなければ、今身体に現れている情動反応(涙が出る、体が震える)を悲しいからだとは意識できない。認知症者では、下肢を骨折しながら歩く人がいる。痛みもことばがつくりだした意識である。人は身体の不快な知覚を、だるい、重い、苦しい、痛いなどのことばで切り分けた。ことばを獲得する前は、ただ連続した不快な知覚だけがあった。あの不快な知覚を様々な感覚モダリティから切り分け、痛みと名づけた瞬間、人は痛みを知ったのである。つまり、痛いというから痛いのである。もし、痛いということばを失うと、主観的な体験としての痛みは消失し、生理的な反応だけが残る。

コミュニケーション機能は、世界を切り分けたことばの二義的な働きである。外的対象の像である言語表象を用いて、我々は時空を超えて生きる。子どもの時のあの夏(there and then)に生きることができるのは、そして10年後の未来にさえ生きることができるのは、すべて言語表象の働きである。ことばを失うと時空を超えることができず、今ここ(here and now)の世界に閉じ込められる。それは世界を認識する手段が、自己の身体から自由になれない視覚や聴覚などの感覚に限定されるからである。

2. 研究の目的

言語の喪失過程でアルツハイマー病者の認識に何が起きているのか、言い換えれば、there and thenの世界(言語の世界)からhere and nowの世界(五感の世界)に生きる過程でおきている変容を明らかにすることであった。

3. 研究の方法

研究1と研究2は文献考察。
研究3は参与観察。

4. 研究成果

研究1、研究2

研究1“Linguistic understanding of illness”、研究2“Alzheimer’s disease from the linguistic viewpoint”は、世界五大医学誌といわれる雑誌に投稿し不採択であったが、現在、再投稿の準備をしている。

研究1“Linguistic understanding of illness”

人間の見ている現実、言語によって創造された現実である(丸山圭三郎、ソシユールの思想、岩波書店、1981)。しかし、人間はことばで分節された世界に生れ落ちるため、この事実に気づかない。

これまで人間の病気の発症や症状の理解には、生物学的方法、自然科学的方法、心理学的方法がもちいられてきた。しかし人間の見ている現実が、言語によって創造された現実である以上、病気の発症や症状においても言語から自由にはなれない。

本論では、アルツハイマー病など、具体的な疾患をとりあげ、人間の病気の発症や症状の理解に言語論的方法を加えることの必要性を論じた。

研究2“Alzheimer’s disease from the linguistic viewpoint”

本論では、一人称のアルツハイマー病者を主人公にして、言語で創造された世界が崩れていく模様を論じた。それは、様々な欲望に執着した人間の意識が崩れていく姿であった。

研究3“A perspective to understand the behavior of severe Alzheimer’s disease patients with loss of language skill”(投稿中)

言語を失ったアルツハイマー病者は、環境依存性が高まる。そこで本論では、参与観察から、言

語で創造された世界を失った重度アルツハイマー病者について、彼女たちの周りの環境が、彼女たちの行動に準備する価値や意味を見出した。これは生態心理学者ギブソンの思考にヒントをえたものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----